

平成 28 年度 第 1 回田原市まち・ひと・しごと創生連携会議 委員意見要旨

(1) 田原市人口ビジョン・田原市まち・ひと・しごと創生総合戦略について

- ・人口変化の捉え方には、2通りの捉え方がある。一つは、文明が頂点になり、衰退していくと考えるもの。二つ目として社会を移り変わっていくもの。移行していくなかで、人口の構造を考えるもの。田原市の地方創生のビジョンは、後者。大きく生活や産業の形が変化する中で、次の社会の活力化を考えるものである。人口は一つの結果でもあるが、渥美半島田原市をどのような社会にしていくかが重要である。

①雇用の創出・就労促進について

- ・誰かが仕事をしていかないといけない。農業、商業などのどの分野でも人が足りない時代が来る。
- ・渥美地域の人口減少を考えるものの、人口減少に歯止めがかからない。小売業が廃業し、商工会員も年々減少している。
- ・雇用の創出と中心市街地の活性化について、商工会としては新しい創業者の支援と廃業していく事業者の支援を中心に考えている。
- ・田原臨海工業地帯に 70 社が進出し、働く人が 1 万 5 千人ほどいる。半分以上は豊橋や豊川などの市外から通勤している。渥美線沿いに宅地を整備し、企業に通える環境、選択ができる環境を整備してほしい。
- ・農畜水産業強化の施策のなかに「日本一の土づくり」という事業がある。土づくりは「土壌診断」が基本となる。これを他の施策と連携し、土づくりから、よい農業、商業の活性化につなげる総合的な仕組みを築いていただきたい。
- ・土壌分析をするのに結構な経費がかかる。環境負荷を低減するために、土壌分析に対する支援の検討をお願いしたい。
- ・40 年前のキャベツ農家は、キャベツ畑が 2ha ほどであった。今は、家族で 5~6ha も栽培している。田原市内で畑が増えたわけではない。トマトや菊の栽培も人手が必要である。最後は人がいないと成り立たない、それが今の農業である。
- ・外国人の農業研修生が 800 人~900 人ほどいる。大きく農業を行っている方は、その農業研修生を頼りにしているところがある。
- ・昨年、一昨年、商工会が中心になり、テーマを「フラワービジネス」として、地域資源である「農業」「花」を活かすことを考えてきた。渥美半島の花に注目して、渥美の農家が元気になるように、農家の元気から商工業者の元気に繋がるように、今以上に渥美半島の花を表に押し出し、生産と消費をつなげていきたい。
- ・技能実習生や農業研修生に日本語を教えるための講師の派遣や日本語教室開催などの環境づくりはできている。また、これからインドネシアの方を招くことが増えていく。

②定住・移住促進について

- ・若者である自分たちの世代が豊橋に転出している理由としては、豊橋の方が住みやすいから。土地の価格もあまり変わらず、揃っているものが豊橋に多い。

- ・田原から豊橋への人口転出の問題がある。女性が住みたいと思えるまちを目指して行く必要がある。
- ・今年度より開始している定住・移住促進奨励金制度を含め田原の良さを広く知らしめる必要がある。

③若い世代の結婚・出産・子育ての希望実現について

- ・結婚支援の現状について、若者の結婚感がとても多様化している。結婚が家や親でもない個人を中心としたものになっている。結婚しない理由に「適当な人にめぐり合えない」「出会いの場が少ない」などの声が多い。
- ・結婚支援については、行政の取組にも限界がある。参加者が固定化され、マンネリ化が進む。田原市の場合、男性の未婚率が高い。
- ・労働人口も減っていき、女性も働くことが増えていく。そんなときに子どもをどこに預けるのかといったことが問題となり、育児・子育ての環境が充実しているところに人が集まることが予想される。

④地域の魅力・住み良さの向上について

- ・公共交通であるバスの利用時間が限られている。コミュニティバスの深夜運行を考えるなど、より使いやすい公共交通を目指してほしい。
- ・田原は、農業のまち。その農業のイメージがあまりよくない。時間的な束縛が長く、休みがないイメージがある。農業のイメージをよりクリーンにしていくことで人が集まる。
- ・世間の方からみた田原の良さに住んでいる方からみた田原の良さをもう一度整理して、魅力発信をしていただきたい。
- ・この地域に住むメリット、デメリットがある。メリットは伸ばす、デメリットを潰す作業をしていく必要がある。

(2) まち・ひと・しごと創生関連事業の効果検証について

- ・KPI（重要行政評価指標）は、一つのポイントをつまんでいるものである。一つの目標を達成しようとするのではなく、全体の目標をしっかりと達成することが望まれる。